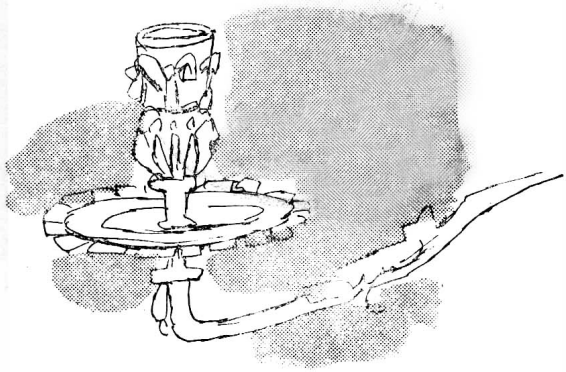
愛が扉をたたく時

高見　順



Roman Books

著者の了解により検印廃止

昭和37年11月10日　第1刷発行
昭和39年6月20日　第2刷発行

愛(あい)が扉(とびら)をたたく時(とき)

著者　高見(たかみ)　順(じゅん)
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
(黒柳製本)
東京都文京区音羽町3ノ19
発行所　株式会社　講談社
電話東京(942)1111(大代表)
振替東京　3930

¥ 280

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

© 高見順 一九六二

愛が扉をたたく時

――が汝の扉を叩くとき、
汝はかれに何をささぐるや

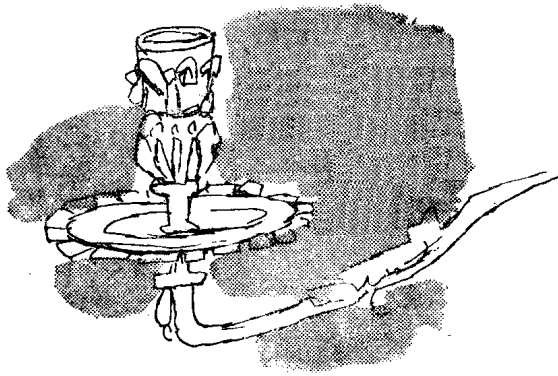
タゴール（山室静訳）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

Roman Books

愛が扉をたたく時

高見　順



Roman Books

著者の了解により検印廃止

昭和37年11月10日　第1刷発行
昭和39年6月20日　第2刷発行

愛が扉をたたく時

著者　高見　順
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
(黒柳製本)
東京都文京区音羽町3ノ19
発行所　株式会社　講談社
電話東京(942) 1111(大代表)
振替東京　3930

¥ 280

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

© 高見順 一九六二

愛が扉をたたく時

――が汝の扉を叩くとき、
汝はかれに何をささぐるや

タゴール（山室静訳）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

装幀

荻　太郎

愛が扉をたたく時

第一章

ゴールデン・マスク

一

私は今、都内のあるホテルの一室で、これを書いている。

ホテルは丘の上にあって、このあたりはパリのモンマルトルに似たところがあると言われている。ホテルの窓から見た景色は、そう言えばちょっと似ている。丘の坂道や人家の間にある急な石段などは殊にモンマルトルを思わせる。パリ心酔の人々はしかし、東京とパリとは全く異質のものだと言うだろうが。

去年、私はパリへ行った。宿はモンパルナスに取ったが、ときどきモンマルトルへ遊びに行った。

ある夜、パリに滞在中の画家のKさんとモンマルトルのキャバレー「ラパン・アジール」へ行ったとき、日本にいる共通の知人のことが、道々、話題になって、

「郷英彦君はどうしてる？」

とKさんは言った。

「元気だよ」

「結婚したかね」

「まだだね」

と私は、投げたように言った。

「まだ、結婚しない？」

Kさんもあきれたように言った。

「依然として独身だ」

「どうしてだろうね」

とKさんは言って、

「松宮みどりさんと結婚しないのかね」

「しないね」

私の言葉に、

「喧嘩したのか」

とKさんは言った。松宮みどりは若い女流画家である。Kさんが会員になっている公募団体に画を出している。

「喧嘩というより、姉さんにこだわってるんだろうね」

と私は言った。松宮みどりの姉は朱実と言って、二人とも実に美しい女性である。

美しい松宮姉妹の、どちらを郷英彦はほんとに好きなのだろうか。そしてまた、姉妹のどっちが果して、郷英彦を好きなのだろうか。実はこの松宮姉妹と郷英彦の多年にわたる恋愛物語を私は書いてみようと思って、今このホテルに来ているのだ。書いて行くうちに、機微が明らかになり

はしないかと思ったのである。
「こだわるって、姉さんに遠慮してると言うのかい？　そんな人とも思えないが」
モンマルトルの石だたみに、こつこつと靴音を立てながら、Kさんはそう言って、
「パリにみどりさんが来たときは、郷君のことを好きだと自分で言ってたがね」
「はっきり言ってた？」
「うん」
私たちは「ラパン・アジール」の前に来ていた。見たところ、キャバレーというようなけばけばしさはなく、普通の古びた邸宅の感じで、前庭のアカシアの花が地面にいっぱい、夜目にも白くあざやかに散っていた。
ここは、パリ画壇の有名な画家たちが昔、まだ無名だった頃に、毎夜集まっていた場所として有名である。扉を開くと、ギターの音が奥の方から聞えてきた。マルセル・ノブラがギターを弾きながら歌をうたっているのだ。それを私たちは聞きに来たのである。
――ここまで書いたとき、部屋の扉をノックする音が、私の耳に入った。モンマルトルの思い出にひたっていた私は、つい、
「アントレー」
と言った。扉がひらかれて――その音に、うしろをふり返った私は、そこに思いがけない松宮みどりの姿を見出した。
「みどりさんか」
彼女はしょんぼりと言葉もなく立っていた。蒼白の顔も異様だった。
「どうしたの？　お入んなさい」
私が言うと、よろめくように彼女は足を進めて、
「死んじゃったんです」
「え？　誰が？」
「姉が死んだんです」
へたな棒読みみたいな言葉だったが、それだけかえって、私は胸をつかれて、
「姉さんが死んだ？」
「自殺したんです」
「どうして？」
と思わず私は言った。
「姉はわたくしのこと、憎んでたんでしょうか」
「いや、そんなことはない」
「だって、わたくしに、ひとことも、何も言わないで、黙って死んで行ったんです」
そう言うと、力が抜けたみたいに椅子にぐたりと腰かけて、

「日曜日に、自分のところへ訪ねて来た人に後始末を頼むって、そう書いてあったんです」
「遺書に？」
「日曜に誰が訪ねて来るか、それで姉さんの恋人は誰か分るんです。ほんとの恋人は誰か……」
「郷君は――朱実さんのその自殺を知ってるのかしら？」
松宮みどりは放心したような眼を窓の外に向けたまま、黙っていた。そうした彼女は凄絶と形容したいような美しさだった。
私も無言のまま、眼をそらした。その私の耳に、低いすすり泣きの声が聞えてきたと思うと、たちまち、それは激しい慟哭になって行った。松宮みどりは、こらえにこらえていたらしい涙を、せきを切ったようにあふれさせた。

二

明日の日曜まで待って、私は稿を改めて書くべきところだが……。
いや、むしろその前に――やはり前もって書きたいと思っていたことは、このまま書きつづけよう。そのほうがいいようだ。
日曜日にどういう意外な事実が現われようと、それはそれで、私の今まで知っていることは、やはりそのまま、一応ここに書いておきたい。いま私は、逆にかえってそういう気持を強めさせられたのである。
そこで私は、松宮朱実にまつわる思い出をこれから書こうというのだが、さて、過去のどの辺から書き出したらいいか。忘れようと思っても忘れられない、強烈な印象を与えられたある一場面をまずここに書いておこう。
今から数年前のある冬、私はラングーンに行った。どういう用事で出かけたかはこの物語には直接、関係のないことだから省くとして、ビルマには戦争中、報道班員として一年滞在していた私は、独立後のビルマを見たいというおもいで、つまりそれが私自身の主目的で、用事にかこつけて出かけて行ったのだが、このラングーンからの帰りに、私はタイのバンコックに寄った。ここも戦争中に一月ばかりいたことのあるところである。
戦後のそのバンコックに、私の学生時分の友人が、ある大きな商社の支社長として駐在していて、私を夕食に誘ってくれた。そのレストランというのが、これまた、戦争中に私の行ったことのある、ヤワラート街の海天楼（ハイテンロー）という中華料理店だった。
その階上にダンス・ホールがあって、食後、友人は、
「腹ごなしに……」
と私をそのホールに案内した。そう華やかとは言えない、むしろ侘しいと言ったほうがいいくらいのホールだった。

ダンサーのなかには、
「コンバンワ」
と日本語を言う女もいた。
バンドもあまり上手ではなかったが、白人らしい顔もまじった、いろんな国籍の人間のいわば混成バンドのようだった。
「あの、ピアノをひいてる男は、日本人だ」
と友人が言った。松竹レヴィウの一行がバンコックに来て、大変な好評を博したが そのとき来たピアノ弾きのひとりが居残ったのだという。給料がいいのにひかれたとも言うし、バンドの質をよくしてくれと頼まれたのだと本人は言っているが——と、友人がそんな話をしているところへ、白系ロシア人めいた肥った女がステージに現われて、歌をうたいはじめた。
「この次ぐらいに、若い女の歌手が出てくるが、これがどうも、日本人くさいんだよ」
友人は私のほうに顔を傾けて言った。私たちはステージに近い席にいた。
「金色の眼隠しをして出てくるんで、ミス・ゴールデン・マスクという名で呼んでるんだが、どうもこれは日本の女じゃないかと言うんだ」
「どうして顔を隠したりするんだろう。日本の女だと分ると、やはり何か都合が悪いのかね」
「戦犯に何か関係のある女らしいという噂もあるんだ。それで、顔を隠してると言うんだが、あのピアニストが自分の恋人をこっそり、日本から呼びよせたんだろうと言うのもいるんだ。席に呼んでも、絶対に来ない」
ひそひそ声ながら、私たちのおしゃべりが気になるのか、ステージの女が、咎めるような眼を、私たちに投げた。私たちは口をとじた。
「ホールに出ませんか」
と、小柄なタイ人のダンサーが私にダンスをすすめたが、私は席についたままでいた。
やがて、金色のマスクをつけた話題の女性が、静かにと言うより、ひめやかなと感じさせる足どりで、ステージに現われた。話から想像していたよりも、はるかに若そうで、そしてまた、肥った白人歌手との対比からか、いかにもほっそりと見える。
銀色に輝くラメのドレスにぴたりと包まれたその姿態の魅力に、私は息をのんだ。それは、ラメの光りのせいか、爬虫類を思わせる冷たさをたたえながら、妖しい情熱を、見た眼に悩ましく感じさせる。
彼女はケ・セラ・セラを歌った。金色のマスクが眼を蔽っているため、その唇は際立って美しく見えた。
私は心をこめて拍手を送った。彼女が日本人かもしれないというので拍手したのではない。ものうげな哀愁といっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb